

『ブライズデール・ロマンス』における 仮面の意味 (3)

——プリシラとホリングズワース——

上 田 み どり

序

ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne [1804-1864]) の *The Blithedale Romance* (1852) は作品全体が仮面劇の性質を持ち、その比喩的な意味での仮面が重要な役割を果たしていることは、すでに拙論の『『ブライズデール・ロマンス』における仮面の意味(1)ーゼノビアの仮面ー』〔広島経済大学研究論集第14巻第3号(1991年12月号)〕において、また『『ブライズデール・ロマンス』における仮面の意味(2)ーカヴァーデールの仮面ー』〔『英語英文学研究』英宝社1993年7月〕において論じた。それらの中で主だった登場人物のうち、ゼノビア (Zenobia) と、カヴァーデール (Coverdale) の仮面の意味と役割についてはすでに論じている。従って今回は、プリシラ (Priscilla) とホリングズワース (Hollingsworth) の仮面の意味を探ってみたいと思う。

1. 二人の保護者——ホリングズワースとゼノビア

プリシラは最初第4章で登場する。それは過酷な吹雪の夜のことで、彼女は衰弱した哀れな少女としてブライズデールに連れてこられる。

Her brown hair fell down from beneath a hood, not in curls, but with only light wave; her face was of a wan, almost sickly hue, betokening habitual seclusion from the sun and free atmosphere, like a flower-shrub that had done its best to blossom in too scanty light. To complete the pitiableness of her aspect, shivered either with cold, of fear, or nervous excitement, so that you might have beheld her shadow vibrating on the fire-lighted wall. (p. 27)⁽¹⁾

この時プリシラは飢えと寒さで病的に見え、ホリングズワースの保護のもとにある。家族も身寄りもなさそうなプリシラの孤独な状態と、このブライズデールの暖炉の燃え盛る家庭的な火が対照的である。そしてその暖炉の象徴となっているのがゼノビアの存在であり、この後彼女はプリシラの後見者となる。こうしてプリシラはホリングズワースとゼノビアの二人に保護されることになる。

ところが「あの顔色の悪い霜枯れた少女」のイメージで描かれているプリシラが第8章の「現代のアルカディア」の中では、カヴァーデールとゼノビアの次の会話に見受けられるように次第に活発な女性に変わっていく。

“... She [Priscilla] is the very picture of the New England spring, subdued in tint, and rather cool, but with a capacity of sunshine, and bringing us a few alpine blossoms, as earnest of something richer, though hardly more beautiful, hereafter. The best type of her is one of those anemones.” “What I find most singular in Priscilla, as her health improves,” observed Zenobia, “is her

(1) *The Blithedale Romance* のテキストは、*The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State University Press, 1964) を使用した。『ブライズデール・ロマンス』からの引用は、すべてこの版からであり、引用に続けて括弧内にページ数を示す。

wildness.” (p. 59)

ゼノビアが髪に何時もつける熱帯の生花と対照的に、プリシラに似合うのはアネモネという野花である。そしてそれがプリシラの性質をよく表している。というのもプリシラは、ブライズデールに連れられて来た時、「見捨てられていた者」であり、博愛主義者の仮面を被ったホリングズワースに物理的に救われたとしても、悲惨な状態の少女であったが、5月の聖母マリアの月を迎え、ブライズデール全体に春の陽気がみなぎる頃から、彼女も生命力を取戻し、その上そこにいる者にあたかも希望を与えてる程勢いを増してくる。⁽²⁾アネモネには「見捨てられたもの」「悲惨」と同時に「希望」といった象徴的意味があり、プリシラもまた「見捨てられた者」と「希望」の両義の比喩的性質が与えられていると思われる。その「見捨てられたもの」としてのプリシラは、ブライズデールに来る前の有り様を暗示していると考えられるが、ブライズデール入植後、彼女は次第にゼノビアとホリングズワースの保護と愛情に包まれていることを確信している様子を示し、弱さを保ちながらも希望に満ちた活発な性質を明らかにしてゆく。

2. ゼノビアとプリシラ

プリシラには野の花「アネモネ」の「希望」を託した明るいイメージと共に、「アネモネ」の野性的特質やかよわく素朴な印象を与える花のイメージに似た実態の伴わない女性としての描写が多い。例えば、次の第8章には次のような一節がある。

“What I find most singular in Priscilla, as her health improves,” observed Zenobia, “is her wildness. Such a quiet little body as she seemed, one would not have expected that! Why, as we strolled the woods together, I could hardly keep her from scrambling up

(2) 水之江有一編、『シンボル事典』（北星堂、1985）p. 9.

the trees like a squirrel! She has never before known what it is to live in the free air, and so it intoxicates her as if she were sipping wine. And she thinks it such a Paradise here, and all of us, particularly Mr. Hollingsworth and myself, such angels! It is quite ridiculous, and provokes one's malice, almost, to see a creature so happy —— especially a feminine creature.” (p. 59)

上記の描写は、ゼノビアがプリシラにふさわしい花として「アネモネ」をあげた上に、リスに例えて野性的特質を挙げ自由に跳ね回るプリシラの姿を楽しんでいるゼノビアの様子が窺える。しかしこの野性味はゼノビアの発言の最後にプリシラの無知、未熟さに対する苛立ちや、プリシラへの教育が必要であるというかすかに悪意を含んだ気持ちが窺えるように、ここに生活する者としての責任や実感が希薄であることを示している。というのも、これまで貧困と保護者喪失のため基本的に生きる権利さえ危うい状況にあったプリシラは、ブライズデールにやって来てこの地を「楽園」と信じきっていて、ゼノビアとホリングズワースを「守護の天使」とみなしブライズデールの実態が分かっていないからである。

その為ゼノビアは「少女監督婦」として、プリシラを実用に役立つ人間として育てようとする。彼女はプリシラに道徳、行儀、社会生活作法という日常生活面の自立の基本を教えるのである。しかしプリシラは必ずしもゼノビアの思いに沿った女性になってはいかない。このことは第17章の「エリオットの説教壇」の場面でゼノビアが、プリシラについて「この子こそ、男たちが何百年にもわたって作り上げてきた女性像の典型」(p. 113) だと言う時すでに、明らかにされている。このように、プリシラはゼノビアに対峙する女性の特徴を、最後まで持ち続けるのである。

さて、ゼノビアの逸話の中で、「ヴェールの婦人」が姿を消したと思われたその時、青白く影のような少女がひとり現れ、夢想家のグループの中で皆に優しくしてもらおうといった、プリシラを彷彿とさせるような少女が

登場する。そしてこの話の途中、ウェスタヴェルトを連想させる魔術師から、ゼノビアを連想させる婦人は、次のような言葉をかけられる。

“There is a certain maiden,” replied the Magician, “who has come out of the realm of Mystery, and made herself your most intimate companion. Now the fate has so ordained it, that, whether by her own will, or no, this stranger is your deadliest enemy. In love, in worldly fortune, in all your pursuit of happiness, she is doomed to fling a blight over your prospects. There is but one possibility of thwarting her disastrous influence.” (p. 115)

ここで「敵」とは、将来に希望をくじく暗い影を投げるものとしてのプリシラのことを暗示している。この疫病神のような者を捕まえるのにヴェールをその人間にかけると魔術師が言う。この言葉に従って物語の終わりにあって、ゼノビアはプリシラにヴェールをかける。ゼノビアは話の効果を盛り上げようとしたのであるが、“your deadliest enemy” (p. 107) という表現の背景に、ヴェールをプリシラから取り除く時のゼノビアの表情に冗談半分の意地悪そうな (mischievous, p. 108) 笑みがあったし、プリシラはその冗談を冷静に受け止められないでいる状況にある。ゼノビアは「男たちが作った女性像」ではなく、フェミニズムの先駆者の一人と考えられるマーガレット・フラーを彷彿とさせる自己解放された、自己を持つ人間を主張しているのであるから、当時の社会的な女性観とか慣習からは彼女は受け入れられ難い女性であったろうと推測できる。それに対してプリシラは「男たちが作った女性像」の典型であり、ゼノビアは反対の立場、敵にあって、これが、悲劇的結末を生むことを暗示する。

3. プリシラの仮面

プリシラは目の前に広がる未知の世界に何の疑いも持たず、自分のアイ

デンティティーを未だ持たない幼子であり、プリシラにとってヴェールは「顔のない仮面」⁽³⁾なのである。しかし、実際に「顔を持たない仮面」はかけ換える時が来る。プリシラのことを第9章で「昨日青白かった彼女の頬に、今日は花が咲いた」(p. 68)と語り手カヴァデルが言っているように、自然の中で変容する美しさへの讃美を示す場面が、その変化を示している。ところが小説のプリシラの役目は、ホーゾーンの短編「ラパティーニの娘」(“The Rappaccini's Daughter” 1837)のベアトリーチェと類似する点もみられる。この短編の主人公ジョヴァンニ青年は、彼女に接近したいが、かなりの危険を伴うことを知っているのではなかなか近づけない。何故なら作品の中で、毒のある花を食べ、その香りを嗅いで生きているベアトリーチェが超自然そのものを体現しているからである。ジョヴァンニは解毒剤の使用で超自然にほかならぬ彼女の存在を「自然な領域」⁽⁴⁾に導き入れ、「意識の光の届かぬ薄暗い領域」から引き離したいと思う。しかし結局はそれはできない。プリシラの場合、ヴェールの仮面をつけている時、超自然であるという特質が催眠術師ウエスタヴェルトの言葉を通して明確になる。例えば、第23章の村の公会堂では彼が、「大砲の轟きも彼女には聞こえない」が「アラビアの砂漠の砂の上を吹き抜ける風の音」や「北極海の氷山の軋む音」「東インドの森の木の葉のざわめく音」がききわけられることを公言する。このことは作者ホーゾーンが、極寒地帯と熱帯を努めて並置することにより、見知らぬ北極圏やオリエントの地を、プリシラの自然の精霊の力で呼び起こすことを示唆している。⁽⁵⁾なぜならヴェールがプリシラを現実からきりはなす役目を果たし、超自然を現実呼び込む「霊媒」としての能力を彼女に付与してようにみえるからである。プリシラがヴェールを被る時、彼女は時間空間を越えている (p. 201) からである。

(3) 佐伯泰樹、「隠蔽と暴露の力学—『ブライズデール・ロマンス』を読む」(東京工業大学『人文論』14, 1988) p. 113-20.

(4) 酒本雅之、『アメリカ文学のヒーロー』(成美堂, 1991) p. 98.

(5) Luther S. Luedtke, Nathaniel Hawthorne and the Romance of the Orient (Indiana University Press, 1989) p. 199.

この超自然の性質は「ラパチーニの娘」のヒロインのそれと一致する。

ホーソーンは別の短編「牧師の黒いヴェール」(1835)⁽⁶⁾においてヴェールを人間世界との遮蔽物として用い、そうすることによって牧師に超自然の力を与えて人間の心の奥底の隠されたものを見ることを可能にした。しかし、彼が牧師の死を孤独なものにしているように、作者は決して超自然と人間世界が両立するとはみなしていないようである。⁽⁷⁾

しかしプリシラはヴェールを脱がされ、結局超自然の部分は取り除かれることになる。ラパチーニの娘が決して人間が住む世界に入れなかったのと同じ、プリシラには仲間との日常世界に住む要素もある。この自然の要素こそ、カヴァデールが健康を回復してプリシラを見る場面で「まるで突然さなぎから出て羽根を伸ばしているような感じ」(p. 162)と述べる時、それは彼女に見出した生命感のことを指しているのである。

4. プリシラとホリングズワース

ホーソーンが黒髪の女性を登場させる時、彼女らは最後に男性の権威の前に跪くとラドキー氏 (Luther S. Ludedtke) が指摘するように、指導力⁽⁸⁾を発揮していたはずのゼノビアはホリングズワースへの思いに自己内部の葛藤を整理できず、屈して消えていった。

一方プリシラは“dark lady”に通じる要素を持ち、ゼノビアの教育の元で“dark lady”の自己を持った女性という性質を示しはじめるが、本質的にはゼノビアとは異なっている。超自然の能力を秘めたプリシラが現実世界で生きてゆくためには、ヴェールを脱いで普通の女性となる必要があるが、彼女自らはヴェールを脱ぐことができない。そこで現実世界を代表する ‘a more powerful existence’ (p. 123) であるホリングズワースの

(6) “The Minister’s Black Veil” (1835) ホーソーンの短編の傑作の一つ。一生黒いヴェールを被って罪の同胞意識を持ちながら生き、死んでいく牧師の話。

(7) 酒本雅之、『アメリカ文学のヒーロー』p. 98

(8) Ludedtke, p. 198.

助けにより、プリシラのヴェールは剥がされる。彼女は、ウエスタヴェルトから博愛主義者の仮面をはがされたホリングズワースに征服される運命にあるかのようにみえる。⁽⁹⁾ところが、ヴェールを取り払われ、霊媒の力、超自然の力がなくなることにより、ホリングズワースとの関係が逆転するのである。

作品の最後で、語り手は二人の姿を見て、次のようにのべている。

As they approached me, I observed in Hollingsworth's face a depressed and melancholy look, that seemed habitual; the powerfully built man showed a self-distrustful weakness, and a childlike, or childish, tendency to press close, and closer still, to the side of the slender woman whose arm was within his. In Priscilla's manner, there was a protective and watchful quality, as if she felt herself the guardian of her companion, but, likewise, a deep, submissive, unquestioning, reverence, and also a veiled happiness in her fair and quiet countenance. (p. 242)

この描写にはホリングズワースは子供のようにか弱き者となり、プリシラは守られる側から守る側に逆転している様子が明白にのべられている。こうして、プリシラがまさにホリングズワースの前に跪くと思われる時、彼女の現実の女性、原初的女性としての性質が力を帯びてゆくのに対し、ホリングズワースは事業の失敗から博愛主義者の仮面が剥がれ、さらにゼノビアの精神的苦悩を知り、自分の罪の深さを自覚することで次第に力強さを失って行く。

プリシラは守られる立場を守る側へと変容した。このことは、ブライズデールの継承という大きな役割をプリシラが担うことを意味する。初めプリシラは、人間的弱さと原初的特質を持つ、「顔のない」女性として登場

(9) Ibid., p. 196

し、現実と非現実、そして人間と超自然的特質といった相対立する精神を具現化していた。

ヴェールを覆っていたプリシラはブライズデールという実験的現実社会で作りだされる時間の制約を越え、超自然をかいま見たかもしれないのだが、虚構ではなく、実人生を生きる女性の典型としてプリシラを置いているが故に、最後には仮面のヴェールはとりさられ、プリシラは人間社会の仲間、普通の人、ホリングズワースの道連れになる。ゼノビアのような闇を覗いた激しい生き方をする者に共鳴し、関心をむけながらも、プリシラを共同体の後継者として残したことは、ゼノビアの対局を生きる者としての姿を描き、作品にバランスを与えようとするホーソーン自身の平衡感覚を示すものであろう。こうした描き方は「宿命の女」とも呼べる黒髪の女性に引かれながら、どこかで彼女たちの魅力的な魔力を恐れ避けようとする作者の内面の様子を示唆するものであるかも知れない。

結 論

結論 実験の村「ブライズデール」は実験国家あるいは人工国家たるアメリカの原型ともとれる。そして、その実験の村を舞台にしたこの作品には、アメリカ初期の作家としてのホーソーンには文学における担い手としての試みが表れているように思う。「同時代の楽天的人達が森林を木材にかえ、鯨を鯨油にかえ、水を水力発電にかえていくのに抗して、ホーソーンは一つの考えに固執していた。“moral conversion”⁽¹⁰⁾である」とロイ・メール (Roy R. Male) が述べているように、時代の急速な変化の中で、物よりも心の在り方に、そして人間の悪に向かう本質に、ホーソーン自身の関心は存在し続けたように思う。また、ブライズデールという理想の村は、最後には悲劇を生んだけれども、彼がこのような作品を描いたことは、単なる組織の改変による理想主義の批判のためだけでなく、心ある人達が新しい理想をかかげて、常に悪をとりこんだ形で社会は作られていっている

(10) Roy Male, *The Blithedale Romance* (Norton, 1978) p. 297.

のだということを、ホーソーンは見抜き信じていたのではないだろうか。